
マジックハーフ

ジュンボ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マジックハーフ

【Nコード】

N3692BA

【作者名】

ジュンボ

【あらすじ】

西暦2020年。

とは言ってもこの世界は近未来ではない。

そもそもこの世界には石油はおるか蒸気機関の発明がないのだ。

よって車や飛行機、宇宙への進出がなく、人々はただ魔法科学によって繁栄をもたらしていた。

それを実現させたのはエルフと言う耳の鋭く長い種族だ。

エルフたちは昔、人間に魔法を伝えたが人間はやがてエルフを恐れ戦争が始まった。

そして現在。 エルフは森に住み、人間は町に住み、お互いに対立している。

出会い

西暦2020年。

とは言ってもこの世界は近未来ではない。

そもそもこの世界には石油はるか蒸気機関の発明がないのだ。

よって車や飛行機、宇宙への進出がなく、人々はただ魔法科学によって繁栄をもたらしていた。

それを実現させたのはエルフと言う耳の鋭く長い種族だ。

エルフたちは昔、人間に魔法を伝えたが人間はやがてエルフを恐れ戦争が始まった。

そして現在。エルフは森に住み、人間は町に住み、お互いに対立している。

2020年大栄ローマ帝国。

「ルキア〜!」

一人の少年が女の子の名前を呼んでいる。新品の軍服を着ていた。

「ヘンリー!?!」

女の子は驚き少年の名前を呼んだ。

「聞いてくれルキア!俺軍隊に入ったんだ。エルフ討伐軍の兵士に

なっ たんだ。」

この時代の軍隊は、主にエルフ討伐軍と言う軍隊があり、16才の成人から入隊できる。

「すごいねヘンリー!!」

「ま、俺が入隊できるようになったのは幼馴染みのお前のおかげだよ。そういえば、ルキアも魔法大学合格おめでとう。」

「ありがとう!! 私エルフを倒す魔法いっぱい研究するね。」

春風が二人の成人と門出を祝うように吹いている。

二週間後

大栄ローマ帝国国立魔法大学大聖堂

『今日はわが大栄ローマ帝国が誇る魔法大学の入学を嬉しく思う。』

入学式なんてどこの世界も同じで長い話しはしばらく続き、その後大学の説明や新しい友達が出来てその日は家に戻るが、ルキアのような地方から来ている人は寮に住む必要がある。

「はあ」

ルキアは寮室に入ると礼服にしわが付くことなどかんがえづぐった

りとふかふかのベッドに飛び込んだ。
寮は木造二階建てで長細い作りの建物だった。それが道にそって並んでいる。

（でも…何で相部屋なんだろう。変な人だったらどうしよう、そもそも歳の近い男の子なんて孤児院じゃヘンリーしか知らないのに…）

ルキアはさらにベッドをバタバタさせる。

その時カラカランとドアを開ける音がした。ルキアは急いで部屋を出て階段を降り下のリビングへ向かった。

玄關にいたのはルキアやヘンリーと同じくらいの歳の男の子だった。緑色の瞳に髪、そしてそれを隠すかのような黄色で大きな帽子を耳まで被っていた。

「あ、あの私ルキア、ルキア・ウェストです。これからよろしくお願いします。」

ルキアは自己紹介する。

少年は少し考える。

「方角がホームネームってことは…孤児か、」

孤児院で育った人間にホームネームは無い。

代わりに方角をホームネームにするのがこの世界の常識である。
ちなみにそれが原因でいじめられることもよくある。

「そうです私、孤児院から来ました。」

（やっぱり変な風に思ってるよ…。）

しかしルキアが思った返事を少年はしなかった。

「僕の名前はウィリアム・ナイティーだ！よろしくルキアさん」
「はい！ウィリアム」

二人の生活が始まる。

「ルキアさんはどうして魔法大学に？」

ウィリアムは質問する。

「私、両親をエルフに殺されて、その……だからエルフを殺そうって訳じゃないんですけど私みたいな子供をこれ以上増やさないために魔法を勉強できたらって思いました。」

「ああなるほど。大変だったね。」

「ううん、でもヘンリーもいたし孤児院の人は優しくったよ。」

「ヘンリー！？」

ウィリアムは不思議に思った。

「あ、ヘンリーは孤児院で一緒だった男の子で今エルフ討伐軍にいるんです。」

「そのヘンリーも親を……」

「うん。だからエルフの話になると怖い顔するんだよね……」

ルキアはどこか悲しそうな顔をする。

「悲しい思い出があるんだね、ヘンリーも君も。」

「ウィリアムはどうして魔法大学にきたの？」

今度はルキアが質問する

「人間とエルフの争いを止めるためかな、」

ウィリアムは手短に話す。

「まあ明日からよろしく頼むよ。ルキアさん」

「ルキアでいいよ」

「じゃあおやすみルキア」

「おやすみなさいウィリアム君」

「……………ウィルでいいよ」

そう言いつと帽子を被り直し二階へ上がる。

（ウィル君か、良かった〜普通の男の子で、緑色の髪が少し出てたからエルフかと思った〜…そんなはずないのに。）

ほっとするとルキアは自分の部屋に戻っていった。

出会い（後書き）

大栄ローマ帝国

ヨーロッパ全土と北アメリカ大陸を領土とし、
アフリカ大陸のほと
んどを植民地にしている。世界最大の帝国。

エルフの森

大栄ローマ帝国フランス地方の森のこと

魔女狩り（前書き）

親愛なるヘンリーへ

魔法大学に入って1ヶ月になります。

まだまだ慣れないことや解らない魔法がたくさんあり大変です。

でも同居人のウィルと楽しくやっているので心配しないでください。

ヘンリーも身体に気をつけて下さい。

ルキアより

魔女狩り

―大栄ローマ帝国学生寮―

バサツとシーツを干す音がした。ルキアは干したシーツにシワがつかないよう丁寧に伸ばす。

ウィリアムとルキアの共同生活も1ヶ月がすぎお互い楽しい大学生活をすごしていた。

「さてと、ウィル、買い物に行くよ」

「はいはい。」

ウィリアムは買い物かごを持つと、帽子を深く被り直し外で待っていた。

しばらくしてルキアが寮の戸締まりを確認してウィリアムの隣に立ち歩き始める。

―魔法大学から少し離れた街―

ルキアは鼻唄を歌いながら商店街を歩く。

魔法大学とその周辺には学生と大学の関係者しか住んでいない。よって買物はもちろん手紙を送るために少し離れた街へ出かけるしかないのだ。

ルキアは右手に手紙を持ち郵便局へ向かっていた。ウィリアムは楽しそうに手紙を見ているルキアを見て笑う。

「でも手紙ってのは便利だね。郵便局に持っていけば帝国領土のどこにでも届くまさに文明の力だね」

「ウィルは手紙書いたことないの？」

「ない。」

ルキアの質問にウィリアムは即答する。

ルキアは時々気になっていた。いったいどこから来たんだろうと郵便局を出てしばらく歩くとある貼り紙が目にとまる。

“我々は魔女と魔女をかばうものを許さない！
魔女とエルフはローマの大栄を汚すブタだ！”

魔攻騎士団

「なに…これ」

ルキアはウィリアムの手を握りながら聞く。

「魔攻騎士団だよ。普段は王室護衛隊だけどローマ十字騎士団が解体されてから魔女狩りやエルフ狩り、とにかく対魔法騎士として活躍してる。」

ウィリアムが説明が終わると、街の人達がどこかへ集まろうとしていた。その時魔法大学の制服を着た二人がルキアに近づいてきた。ルキアの友達だった。

「ルキアルキア！大変だよ！今、魔攻騎士団の人達が魔女の家に行こうしてるの！」

「魔女の家！」

ルキアはウィリアムを置いて魔女の家に向かう。

ウィリアムはすっかり置いてかれたが、人気のいなくなった商店街で彼は帽子を脱いだ。そこには彼の緑色の髪からエルフほど長くはないが人間より鋭く尖る耳が出ていた。

ウィリアムはいつもとは違う深刻な顔でつぶやいた。

「魔女……」

――魔女が住んでいると思われる家の前――

ルキアは友達の二人と三人で魔女の家に向かった。

魔女と言ってもおとぎ話に出てくる暗い森や山奥にいる訳ではない三人はレンガ造りの大きな建物の前にいた。要するに自分たちの部屋以外は全て共同の建物だ。

その時突然玄関が開いた。中から銀色の鎧を着た男がまだ幼い女の

子の手を強引に引つ張り観衆の前に投げ倒す。その後、何人か玄關から出る。

家族だろうか、ルキアはそう思った。

やがて銀色の鎧を着た騎士達の一人がは腰から剣を取り出し女の子に突き出す。

「貴様、怪しげな術を使い何をするつもりだ！」

騎士はかつこ良くそう叫ぶと無抵抗の女の子を蹴った。騎士の靴は銀色の鎧のように固く蹴るだけで骨折しかねない。やがて騎士は女の子の顔を何度も踏み潰し髪を引つ張り地べたに倒した。やがて観衆から『やりすぎだ』と言う声が聞こえた。その瞬間ルキアは女の子の体を抱きしめ守ろうとする。

「女ゝ何のつもりだ！」

「もうやめて！この子死んじやうよ！」

「馬鹿が、もうよい。」

次に騎士はとんでもないことを言う。

「剣を抜け魔攻騎士団よ！邪魔な市民も魔女も切れ！」

その時銀色の鎧を着た騎士達は観衆に襲いかかる。市民は一斉に逃げ始める。ルキアは女の子の止血を急いでいて逃げられない。そんなルキアに騎士は剣を向けた。

「死ね、魔女が！」

「助けてヘンリー！」

ルキアは目をつぶったもうダメだ。暗い視界の中昔エルフに親を殺

されたときのことを思い出す。炎が家を包み無数の矢がふりかかる。

ドンと音がしたルキアは目を開けて光を取り戻す。何があつたか知らないがさっきまで剣を向けていた騎士が数メートル後ろに飛んでいた。その次にルキアが見たものは槍を持ったウィリアムだった。

「ウィル！遅いよ！」

ルキアは泣きそうな顔で叫んだ。

「貴様、何者だ！　我々を魔攻騎士団と知つての無礼か。」

「帝国国民を傷つけるやつらが“騎士”を名乗るな。」

ウィリアムは槍を構え直す。普段と違う顔つきになり槍を構える姿は使い慣れているように見えた。

「隊長！」

気付くと他の騎士達にウィリアムは囲まれる。無数の剣が襲いかかるうとしてゐる。

魔攻騎士団（前書き）

王室護衛隊

基本的には大栄ローマ帝国の王族を護る騎士達だが時代と共に部所が増えていく。

魔攻騎士団

王室護衛隊の一つ。エルフ討伐軍から指揮や、魔女狩りなど国内の魔法問題にあたる人のこと。

魔攻騎士団

無数の剣がウィリアムを襲う。

ウィリアムは自分の持つてゐる槍を両手で持ち、そのまま腕の上にあげる。そして両手で槍を回すとぱつとウィリアムの周りから風が発生し槍の遠心力を利用して横に振った。その瞬間ウィリアムに向かつていた騎士達が後ろの建物の壁まで吹き飛ぶ、通常鎧を着た騎士を風だけで吹き飛ばすことは不可能だとするとこの現象は魔法だ。

「な、なんだこれは」

「風を利用した魔法だ。例えば石ころや砂は風によつて飛ばされてしまふし岩は風化して形を変えるだろ、そこから風と地の優劣の術式を作り魔法目的を出す。その後風を発生させ魔力を混ぜることで魔法にしたわけだ。結果魔法の範囲の鉱石は風に飛ばされる。」

ウィリアムは長々と説明する。が魔攻騎士団のリーダーはニヤリと笑い剣を勢い良く抜き炎を出した。

出した炎がウィリアムに向かう。

ざつと土を蹴りウィリアムは炎を避ける。そこえ魔攻騎士団のリーダーの剣がウィリアムの視界に入る。

ガンツ！金属音が鳴り響き剣と槍が交差する。

「魔法を使えるのは貴様だけではないぞガキが！我々は魔攻騎士団だ」

「くそつ術式だけの省略魔法が。」

その後何度も何度も刃と刃が交差し弾き、二人は衝突する。

槍は相手をつくことに特化した武器だがそのため近距離まで詰めら

れるとその長さのせいで柔軟に斬り込めない。

剣は切ることと突くこともできる。しかし、距離の離れたところで槍と闘うと三倍の力を必要とする。

気付けば二人とも息が上がっていた。

――少し離れた民家――

ルキアは友達と共に女の子を保護した後近くの民家で応急処置をしている。民家の前を街の男達が守り、中を女性と子供達が手伝う。女の子は痛々しく全身アザだらけで赤く腫れ上がっている。まぶたは青く膨れ鼻血も出ていた。

「ひどいよこの子が何をしたの……」

「そもそも魔女なの？」

ルキアの友達の二人が応急処置をしているルキアに聞く。しかし、その答えを彼女は知らない……今出来ることは女の子を助けることだけだ。

――町役場――

「では証拠不十分なので魔女の仕業ではないのですか？」

白い髪の老人は聞いた。

「もちろんです。魔術の発動も見られませんかし魔法がらみではないでしょう。」

真紅の鎧に金の髪、高身長の方がそう答える。

「では私はこれで。」

マント取り部屋を出ていこうとしたその時ドアが強く開いた。

「大変です。魔攻騎士団の連中が勝手に魔女狩りを開始したようです！」

「何だと！」

「現在、魔女をかばった少年を広場で公開処刑にするそうです。」

――街の広場――

街の中心には広場がある中央には噴水があり池やベンチが見られた。いつもは街の憩いの場なのだが今日は少し違う空気が漂う。

「ふん。しぶとい奴め」

ドサツ。ウィリアムは両手両足を縛られ街の広場の噴水の前に投げ出された。

槍を奪われ顔には殴られた後がある。

「……………くそっ」

「はっ！馬鹿めが、いいか我ら騎士団の剣は通常の3〜4倍の強さで斬りかかる事が出来るんだよ。」

「魔法大学の重力魔術と錬金術のおかげでな。」

騎士達が罵声をウィリアムに浴びせる。

「彼を離せー！」

「横暴だぞ！」

広場の周りではそんな騎士達からウィリアムを助けようと街の人が集まったがそんなことできるはずもない。騎士に勝てる訳がないのだ。

そんな中応急処置を終えたルキアはウィリアムを心配して広場の前まで来ていた。彼女は殴られているウィリアムを見て広場の中心へ向かい騎士団のリーダーに言った。

「ウィルを離して下さい！」

「ほーさっきの女かぁ」

騎士団のリーダーはルキアの体をじろじろ見ると笑いながら言った。

「ならそれなりの頼み方があるよね、お前らその女を押さえろ。」

そう言うと騎士の二人がルキアを押さえようとする。

「やめろ。彼女に手を出すな！」

ウィリアムは必死にそう叫ぶが騎士達はやめない。

その時、赤い閃光が何本か広場を横切り風景が赤く染まる。そして突風と共に騎士団の鎧が切り刻まれ悲鳴と共に倒されていく、噴水の水が弾け飛んだ。

ウィリアムは赤い閃光を目で追うが、正体が解らない。異常な速度で移動し騎士達の間をすり抜け、煉瓦の建物や道は傷一つついていない。

みるみるうちに20数名いた騎士団が誰一人反撃することもなく全滅した。

気付けば赤い閃光は無くなり、赤い鎧を着た高身長 of 騎士がルキアの前に立ちルキアにマントを羽織らせた。マントの柄は大栄ローマ帝国の軍旗と王室護衛隊のマーク…

「大丈夫ですかお嬢さん」

「ま、まさか…」

ルキアは誰だかは知らないが彼の役職は知っているようだ。そして彼の一声でそれは確定した。

「はじめまして王室護衛隊の中の最上位の一人、真紅のラゼットです。」

魔攻騎士団（後書き）

真紅のロゼット

王室護衛隊の最上位、つまり王の騎士の一人で真紅の鎧を着ている。彼らの発言は政治、軍などに影響を与えることもある。また貴族ですら彼らに頭が上がらない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3692ba/>

マジックハーフ

2012年1月13日18時50分発行